

受診と聴取

— 日本語雑記・六一 —

工藤力男

我がせこにあが恋ひをれば

萬葉集を少し勉強した人なら、たいてい記憶に残っていることの一つに、動詞「恋ふ」の取る格助詞が後代とは異なることがある。例えば巻第十一の作者不明歌、

我がせこに吾が恋ひをれば我がやどの草さへ思ひうらぶれにけり

この歌の第一句は原文が「我背兒尔」なので、「わがせこに」の訓は動かない。この歌は、第三の勅撰集『拾遺和歌集』の巻第十三に人麻呂の作として次の形で載っている。

我がせこを我が恋ひをれば我がやどの草さへ思ひうら枯れにけり

奈良朝和歌と平安朝和歌の間で、動詞「恋ふ」の取る格助詞が「に」から「を」に変わっているのである。

格助詞だけではない。いわゆる完了の助動詞の承接も変わった。すなわち、自動・受身的な無意志性動詞への接続を原則とする「ぬ」から、他動・使役的な有意志性動詞への接続を原則とする「つ」への変化である。

紫の帯の結びも解きも見ずもとなや妹に恋ひわたりなむむ（萬葉集・巻第十二）

飽かずして君を恋ひつる涙こそ浮きみ沈みてあり渡りつれつれ（新撰萬葉集・下）

我が師佐竹昭広は、昭和四十三年の論文「恋ふ」の歴

史」で、「君を恋ひつ」と「君に恋ひぬ」との構造的な意味は、「酒を飲みつ」と「酒に飲まれぬ」くらいの懸隔があるはずだ、と述べている。基礎語というべき「恋ふ」なのに、かかる変化があったのである。

格支配は変わる

社会の変化に伴って人間の意識が変わり、意識の変化につれて語の意味が変わる。格支配の変化もいろいろ指摘されている。古代、「そむく」はヲ格支配が一般であったが、中世以降、ニ格支配が優勢になった。やはり中世の「乗る」には、「舟に乗る」のような自動詞用法と、「舟を乗る」のような他動詞用法があった。「別る」が、古くは一般にヲ格支配の動詞であったことは高等学校の古典の時間にも学ぶ。

古今和歌集仮名序の「かつは人の耳におそり、かつは歌の心に恥ぢ思へど」に見える、「おそる」の格支配の変化は、同じ心理作用を表わす動詞に起こった点でも「恋ふ」のばあいに通ずる。これらの変化には長い時間を要し、二つ以上の助詞が共存して語義の微妙な差異を担いもするの

で、古典の読解には細心の注意を要することになる。

現代語については、〈国立国語研究所資料集・7〉「動詞・形容詞問題語用例集」（昭46）に、国語辞書十二点による「自他の決めにくい動詞」五百三十余の語の表があり、四百八十余の動詞について「自・他の決定に参考となる用例」があげてある。その一端を示そう。

〔自〕 何物をも有せぬ細君に甘んじると云ふ事（蒲団）

〔他〕 肉体の死苦を甘んじると云ふ事が（青銅の基督）

〔自〕 此れが最も穿つた観察であるかも（春琴抄）

〔他〕 岸壁の二分の一を穿つて居た。（恩讐の彼方に）

前後の文脈を削って掲げたが、「なぜこれが？」とも思うものもある。要するに助詞「を」を取れば他動詞、しからざるは自動詞という判定らしい。わたしはこの処理に納得しがたい。

格支配について考えると、例えば「好き」の品詞性のよ

うな問題もある。動詞「好く」は、中世には「ニ好く」の形が一般で、心が引かれてどうにもならぬ状態を言い、奈良時代の「ニ恋ふ」に似た性質の語であった。この時期、「ヲ好く」も用いられるようになったが、他動詞性はなかなか発達しなかった。今は、主格助詞「が」を取る形容動詞「好きだ」の語幹用法が最も安定している。今後も動詞

として発達することは多くあるまい。

このように、動詞の格支配の変化は個別的な現象の性質が強い。江戸時代の本居春庭『詞通路』（こばのかみいし）をはじめ多くの研究があるが、傾向や法則を把握するには至っていない。

本稿の材料は、特定の人の使用に偏らないように、多くは新聞・放送・インターネットによった。特記しない新聞は朝日新聞の東京・名古屋の各本社版、夕刊には「夕」を小書きする。見出しと本文を並記するとき、見出しの頭に◎をつける。紀年は元号により、昭和・平成の頭字で略記することがある。括弧書きのアラビア数字は、元号による年月日である。

を受診

昨年は新型インフルエンザが流行し、病院や診療所が大忙しで、患者数、感染予防対策の報道もきりがなかった。それらの中から拾ったラジオ第一放送のニュースがある。

どの医療機関を受診するのがよいか (21.5.7 七時)

別の病院を受診 (21.6.25 十三時半)

TBSテレビの夕方のニュースのメモは右の二例と違う。

××病院で受診 (21.10.14)

不明な箇所や尻切れがあるのは、台所仕事の傍らに聞いた走り書きゆえである。

耳を目に代えて朝日新聞の紙面を少し見よう。

軽症で医療機関を受診することもなく (21.5.1 東京 夕)

横浜市内の医療機関を受診したのは (21.5.2 東京) 右のラジオのニュースと同じ表現である。

一連の報道を追ってゆくと、同じ新聞でも違った顔を見せることがある。東京朝日の第一面筆頭記事「新型インフル・メキシコ」の中に、「専門医証言」と題する小さな記事があり、次のように書いてある。

高額の負担につながる医療機関で受診せず (21.5.5) その六日後の第一面、「台湾でも2人」の記事には左記のようにある。

成都への機内で症状が出たため到着後に病院で診察を受け (21.5.11)

こちらの「病院で診察を受け」を縮約すると「病院で受診し」、すなわち、メキシコの「医療機関で受診」と同じ文型になるはずである。

ことは、このたびのインフルエンザ報道に限らない。六

年前の朝日新聞には、「スギ花粉症の患者が早くも医療機関を受診している」とある（16:12:26）。わたしが学んだ日本語では、「病院／医療機関で受診」以外には考えられない。しかるに今は、右に掲げたように、「病院／医療機関を受診」が大流行しているのである。

を聴取

昨年は、衆議院の総選挙、政権交替など、政治をめぐる話題も事かかなかった。ほかに、民主党の小沢一郎衆議院議員の政治資金疑惑がさかんに報ぜられた。年が明けて出現したが、小沢議員自身と秘書に対する事情聴取に関する報道である。

特捜部は小沢氏を1月23日に事情聴取したが、不透明部分が残るとして、再聴取を行ったとみられる。

(22:22 東京讀賣)

右の「小沢氏を1月23日に事情聴取」が、わたしには不自然に感じられる。

「事情聴取」から「事情」を削ったのが、郵便料金の不正にかかわる、厚生労働省村木局長の冤罪事件の記事にも見える。

ところが特捜部が、口添えしたと見ていた国会議員を聴取したのは、村木被告を起訴した後のことだった。
(22:9:11 YOMIURI ONLINE 「社説」)

この表現でわたしが留意した早い例は、八年前の産経新聞の見出しにあった。

東京地検 ムルアカ秘書を聴取 鈴木議員 偽証など裏付けか (14:7:26)

昨年、韓国の前大統領の疑惑報道にもあった。

韓国・口前大統領を聴取 (21:5:1 東京朝日)

これは第十一面のトップ記事の見出しである。

一つの報道に「を」「から」の並存することもある。産経新聞のネット配信記事で、見出しと本文で格支配が異なるのである。

◎ 大久保を聴取 東京地検

大久保隆規被告 (48) から任意で事情聴取を始めた。
(22:1:5)

同じ事例は、六年前の朝日新聞東京本社版にもあった。

◎ 三菱ふそう前会長を聴取 車輪脱落 証拠隠滅容疑も

三菱ふそうトラック・バスの宇佐美前会長 (16日辞

任)から事情聴取を始めた模様だ。(16:425)

見出しに「を」、本文に「から」とある。なぜだろう。

右の二つの記事からうかがわれるのは、字数を調整しようとする意欲である。すなわち、見出しの字数を少なくしたいとき、格助詞のカラに代えてヲを使うという解釈である。新聞記者にとって、カラとヲは同義の助詞であるらしい。無理に字数を減らしたり揃えたりするために、特に新聞の見出しに変な日本語が出現しやすことは、先に本誌二百一号の「新聞醜悪録続貂(承前)——言語時評・十六——」に書いた。

本節の「何某を聴取」は、前節に見た「医療機関を受診」と同じく、わたしの学んだ日本語にはなかったものである。いつの間にか変化していったのだ。それが変化したのはなぜか、いつからか、どのようにか。

少年層の言語意識調査から

前の二節で着目した現象について、若い世代の使用実態が知りたいと思った。そこで、この秋、いくつかの中学校・高校の国語科教員に、左記の言語意識調査を依頼した。

問 次の文の空欄に、あなたがふだん使う語(助詞)を

記入してください。所要時間は十分ほどでお願いします。

- 一 来年、友だちの花子さんは三つ、わたしは四つの大学()受験します。
- 二 今度のレースに参加するたくさんのヨットが、港()出入りしています。
- 三 十月一日、京都駅()発着する列車から全車両が禁煙になります。
- 四 インフルエンザが流行し、診療所()受診した人は二百人に上った。
- 五 わたしは結婚式の日取りのよしあし()固執しません。
- 六 強豪を相手にして、悔いのない活躍()期待します。
- 七 おもしろいので、時間を忘れてそのミステリー()読みふけりました。
- 八 政府は、事態の成り行き()注視しています。
- 九 県警は、取賄の疑いでA議員の秘書()聴取する予定です。
- 十 人々は、長く待ち望んでいたミケランジェロの名

画() 見入っています。

調査の本命は四と九であるが、回答者がそれを意識しすぎないように他の語も交えた。ついでに漢語と和語とでどんな差が出るかも考えて作成した。甲府、大垣、水戸の高等学校各一、東京にある中学高校一貫校二つの協力で、七百通近い回答を得た。

四「受診」については、若干の地域差らしきものが見えた。甲府・水戸ともに、ヲがデの約三割増に過ぎないが、大垣ではヲがデの二倍、東京では反対にヲがデの三割減である。その理由に思い当たることはない。九「聴取」については、カラと回答した数はいずれの学校もごく少ないが、カラの回答が上級学年に偏る傾向がある。

なお、和語の複合動詞は、十の「見入る」では上級学年ほどニが多くなる。古文学習の影響だろうか。一方、七「読みふける」では、ヲがニの二倍ほどである。

漢語「受診」の構造は「診察を受ける」と解することができる。これをサ変動詞にした「診療所を受診する」では、「診療所を診察を受ける」の意味になる。近年の日本語はそれを認めるらしいのだ。「病院で内科を受診した」のような表現もなされる。これは、「病院で」が既にあって、

デは用いにくいからだろうが、内科は病院の一部局にすぎないので、「何某病院の内科で受診した」が正統だろう。

漢語「聴取」は、上字下字ともに動詞として「聴き取る」と解するのが自然だろう。この動詞の対象は、人物・機関・組織など（以下、ヒトと表記する）、事情・意見など（以下、コトと表記する）の二つがありうる。すなわち基本文型は「ヒトからコトを聴取する」である。だが、右に見た「大久保を聴取」などは、「ヒトからコトを聴取」の傍線部を省いた短絡表現で、今それが著しく流行しているのである。

データは語る

「受診」については「医療機関で」から「医療機関を」へ、「聴取」については「ヒトから」から「ヒトを」への変化が進んでいるようである。これについて、確かな数値が欲しい。そこで、朝日新聞社のデータベース「聞蔵Ⅱビジュアル」で粗い調査を試みた。

初めに、「受診」について昭和五十九年から五年ごとに検索し、平成廿二年八月末日までの数値もあわせて掲げた。昨年度の総数が際だっているのは、新型インフルエンザ流

	昭59	平元	6	11	16	21	22
で受診	6	21	24	116	146	350	87
を受診	0	3	11	77	147	749	240

	昭59	平元	6	11	16	21
コトを聴取	13	55	46	58	53	41
ヒトから聴取	5	5	44	32	16	22
ヒトを聴取	2	31	29	36	64	49

行のゆえであらう。その五年前は、「で受診」と「を受診」は拮抗していたが、続く五年のあいだに完全に逆転した。そして今年は遂に本来の用法の三倍である。それにしても、昭和五十九年の「を受診」皆無の意味は大きい。「受診」をめぐる言語風景が四半世紀の間に一変したのである。

「聴取」についても五年ごとに検索し、今年のぶんは含

まない。基本的な類型「ヒトからコトを聴取」の、「ヒトから」が「ヒトを」に変わる様子に注目しよう。「を聴取」の格支配の変化は四半世紀前に始まっており、「を受診」のそれよりも緩やかであるが、最近十年間は特に激しく変化していることがわかる。

平成元年分について、見出しと本文とで助詞の異なるものを見ると、「ヒトを聴取」三十一件のうちの二件、いずれも見出しには「を」がある。

◎労働省元幹部を聴取 リクルートの関連追及 東京
地検

同省幹部から参考人として事情を聴いた模様だ。

(114)

◎ダイキン社長を聴取

山田稔社長 (67) から参考人として事情聴取した。

(38)

見出しにカラ、本文にヲを用いる逆の例はない。わたしの推測は当たったようだ。

この二語の格支配は確実に変化している。

辞書の記述を見る

右に見た実態が識者にどれほど把握されているか、手っ取り早く辞書に就いて見よう。

「受診」は若い語らしい。『日本国語大辞典』第二版は、明治四十五年、森鷗外『羽鳥千尋』に名詞として用いた例を初出とし、そこに掲出された三つの用例中に動詞の例はない。やや詳しいのは『明鏡国語辞典』(平15)の「成人病検査を―する」、『三省堂類語辞典』(平17)の「内科で―する」、『大辞泉』第三版(平18)の「診療所で―する」、

いずれも基本文型に従ったものである。

四年ほど前から辞書の記述が動き出す。『現代国語例解辞典』（平18）には、

診察を受けること。「内科を受診する」「早期受診」
〔受診票〕

とあってデ格支配の例をあげない。少し詳しいのは『岩波国語辞典』第七版（平21）で、

〔名・ス自他〕診察を受けること。「内科で―する」
〔内科を―する〕

とある。デ格支配の用例を先にあげたのはいいが、デ格支配が自動詞で、ヲ格支配が他動詞だとするかのようないびつな扱いは、先に国語研究所の資料集で見た処理に通ずる杓子定規である。補足説明がないのも惜しい。

「聴取」について、やはり『日本国語大辞典』第二版によつて、ラジオや無線の「聴取」ならぬ、本稿で論じている意味での用例を見ると、『正法眼蔵』の用例「この心性を聴取し」まで遡ることができる。近代では、明治十年、矢田挿雲『江戸から東京へ』の「藤屋の主張を聴取し」をあげている。

小さな辞書では、「コトを聴取する」型の例をあげるの

が一般であるが、『大辞林』第三版（平18）に「ヒトからコトを聴取する」型の作例「被害者から事情を―する」を示す。『学研国語大辞典』（昭54）は、火野葦平『糞尿譚』から「気さくな阿部は……赤瀬からも意見を―して、早速願書を作製してくれた」を引いている。このように、近年の辞書は格支配の変化に注目していない。

去りし九月、小内^{おない}一^{いち}さんの『てにをは辞典』（三省堂平22）が出た。文庫本を中心に、二百五十人以上の作家・評論家の文章、雑誌・新聞などから用例を採集して六十万の結合語例を載せた、使用実態の知られる貴重な労作である。それによると、「受診する」の結合語は「病院で」のみ、「聴取する」のヲ格支配の対象は、「意見／経過／事情／捜査の模様」、すべてコトである。

変化の背景を考える

本稿の初めに、基本的な和語の動詞に起こった格支配について粗描したが、漢語動詞にはさほど大きな格支配の変化はないと言つてよいだろう。それでも、「案内」などは注意すべき漢語のようである。この語は早く日本語に入ったこともあって、近代までに、「ヒトを／場所へ／場所に

／場所を案内する」が可能で、多様な格支配が実現した。

一方、本稿で考えている用法の「聴取」と「受診」は、日本語史に登場した時期が新しく、「案内」ほど多彩に用いられるには至っていない。それにもかかわらず、右に見てきたような格支配の変化が進んでいる。これはいかに解釈すべきなのだろう。日本語の発展なのか、退化なのか。そう考えてあれこれ模索しているのだが、さっぱり埒が明かない。ここに、その模索の様子を明かして諸賢のご教示を仰ごうと思う。

今夏、讀賣新聞のネット配信で見たものである。

◎ 中学3年の女子生徒による放火、殺人未遂事件

一緒に自宅を放火する計画だったことを明かしたと

こう。(22.7.9)

似たような事件が、今年八月、岐阜県中津川市でも起こった。自宅に灯油を撒いて火をつけ、小学生の娘を死なせて自身もやけどで入院した男が、病院を抜け出して六日後に捕まった。この事件について、テレビの「報道ステーション」(9.23)で、女性キャスターが「自宅を放火して」と報じたのである。わたしの言語意識は「自宅に放火」をよしとする。

前引『てにをは辞典』の「放火する」の結合語は、対象の「アパートに／家に／自宅に／店に」と、放火目的の「復讐に」である。大報道機関では、丹念に練られた原稿を、厳しく訓練された読み手が読むのである。だから、これは確信的な表現だと言っていいたいだろう。

その他の動詞について、たまたま目にしたものをあげる。
『YAHOO! JAPAN ニュース』の「最近の主なトピックス」欄には、「捕鯨 豪首相が日本提訴を言及」(22.2.19)とある。毎日新聞のネット配信記事に、「今月23日には、地元発の航空会社「フジドリームエアラインズ」(FDA)が3路線を就航し、利用者の増加に期待がかかる。」(22.7.4)がある。これは記者の署名入りである。先日、教育テレビ『N響アワー』で、女性アナウンサーの「シューマンを注目した」を耳にした(22.10.17)。「てにをは辞典」による「注目する」の結合語は、ヲ格が三つ、ニ格が八つである。文化庁の〈新ことばシリーズ〉(4)〈言葉に関する問答集——敬語編(2)——〉(平8)に、「最近の敬語は、聞き手を配慮した丁寧語と、云々」(9.41)が見える。「に配慮」を用いるわたしに、この「を配慮」は不自然である。当代の辞書が「配慮」について、「心をくばること」と記

述するのは当然で、この「心」は話し手の心である。それなのに、諸辞書の作例は「当人の気持ちを／相手の立場を／当事者の気持ちを―する」である。これでは「話し手の心を相手の気持ちをくばる」となる。『てにを』は辞典の「配慮」の結合語は、ヲ格支配には「貢献度を」「幸福を」の二つだけ、ニ格支配には「安全に」「感情に」など十五が見える。

日本語の歴史における格助詞の交替現象は、「京都へ」／「行く」「水が」／「を」飲みたい」を代表例として盛んに議論されてきた、言語変化の一齣として、あるいは言葉の「ゆれ」として。だが、本稿で見えてきたのは、それらとは異質なようだ。これはやはり、漢語の熟語によるサ変動詞に特有の現象と解すべきだろう。これは、漢語動詞の格支配が「から」「に」「で」「を」を捨てていることを意味する。あえて言うると、「を」一つに収斂する現象、漢語サ変動詞における「ヲ格単一支配」の進行である。

日本語文法で格助詞を構文機能で番付すると、「ガは横綱、ヲは大関、ニは関脇、以下は平幕」というのが、大学の文法の授業でわたしがよく用いた譬喩である。主格のガを別格とすると、ヲの優位は動かないからである。その表

れなのだろう、わたしは不要と考える「を」を無闇に挿入した表現がはびこっている。細川内閣瓦解の原因になった深夜の発表「国民福祉税を創設をいたします」をはじめ、わたしの手控えにはこの手の表現がうようよしている。発言者を明記せずにいくつかあげる、「犯行を指示していることが判明をした」「事件が発生をした」「死去をしたキム・イルソン」など。

言語は効率的な意思伝達の方向に進む。そう言って、すべての言語変化を肯定的に受けとめる人もある。彼はこの現象も合理的な変化だと言うだろう。だが、はたしてそうか。近年の日本人は熟語の構造を考えることなく用いている。そこに格助詞「を」が侵入するのだ、わたしにはそのように思われてならない。

日本における漢字の未来

漢字をめぐる現代日本語の状況を別の角度から見ておこう。

共同募金に関する報道で、「募金を呼びかける」「募金した通行人」「募金が集まる」「募金を届けた」などの表現にいつも接する。「募」は常用漢字、中学校では訓「つものる」

すなわち意味も学ぶことになっている。学校で確かに学習していたら右に書いたような変な使用例は出現しないはずだが、現実には甘くない。

ことばは体系の中にあるので、一つだけ取り出して見ても全体はわからない。「募金」をめぐるさまざまな語彙も知らねばなるまい。募金の呼びかけに応ずること、集まった金をなんと言い、どう書くのかと。ところが、「募」と対義的な漢字は常用漢字に見えない。そこで、右のような間に合わせとしか言えない表現が氾濫するのだと思う。

『岩波国語辞典』第七版（平21）の「募金」の項には次の補足記事がある。

醸金・寄付する行為の意は、一九八〇年ごろ学校から広まった誤用で、現在かなり多用。教師が言った「—のお金を持つて来なさい」などを寄付の金銭と誤解したせいだ。

誤用の始まった時期を特定した鋭い指摘であるが、その原因の考え方は甘いのではないか。さらに一歩ふみこんで考えると、「醸」が常用漢字になくて「醸出／醸金」が使えないので、何でも「募金」で済ませたのだと思う。

九年前の中央省庁再編のさい、「文部省」が「文部科学

省」に変わった。「文部」は文科の「文」で、「理科」軽視と解釈したらしい。「文」の内実は多様で、時代によって解釈が変わったようだが、日本では、文武両道・文武百官などの言葉から知られるように、長く「武」に対して用いてきた。天平宝字二年、「式部省」は、「文官の考賜を惣べ^{つとせ}掌る^{つかさど}」ゆえ「文部省」と改称され、「兵部省」も「武部省」に改称された（『続日本紀』）ことがそれをよく語るように思う。中近世、ガクモンの漢字表記は「学問」よりも「学文」が多かった。

昭和十七年、聖戦遂行のため、文部省に「科学局」を設置した。昭和三十一年には科学技術庁を設け、今度はそれを吸収しての文部科学省である。官僚や政治家は「科学」がよほど好きなようだが、一方で「人文科学」「社会科学」とも言うのだから、省名に「科学」を入れることにさほど意味があるとは思えない。近代は「文―理」の対義関係が一般的なのに、文部科学省という奇妙な名称にしたうえ、略して「文科省」と書く。これは「理科」排除の表明のように見えるし、わたしはつい「ブンカ省」と読み誤る。なるとる皮肉か。

わが国の国会にも愚行がある。俗語「買春」を法律の名

称と条文に用いて認知したことである。その名は「児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律」。『岩波国語辞典』第七版、「かいしゅん【買春】」の項には、「一九九五年ごろから使われ出し、音読みでは「売春と紛れるので区別してこう言うのだと説明する。『学研現代日本語辞典』改訂三版(平14)には、「かいしゅん【買春】(俗) ↓買春ばいしゅん」として俗語であることを明記している。国会は、常用漢字でありさえすれば読み方も組み合わせも勝手放題だと表明したようなものだ。しかし読み方については一言も触れていない。法律の文言に対して厳密を通りこすほど細かくうるさいはずなのに、これほどいう能天気なのだろう。世にはびこる奇々怪々な漢字の人名は、既に政府のお墨付きなのだから、それと平仄を合わせたのかもしれない。

わたしの脳裏に浮かぶ未来の日本には、漢字による異様な光景が広がっている。

(二千十年十二月)

追記

初校の刷りが出たとき、インフルエンザの流行に関する

報道がしきりで、ラジオで聴いたかぎりでは、すべて医療機関「を受診」であった。(二月十日)

前稿の訂正

二百十三号所載の拙稿「八ツ場ダム」のうち、88ページ上段の三ヶ所の元号「長享」は、いずれも「貞享」の誤りです。謹んで訂正します。